

## 生・老・病・死の倫理

### — 仏教の死生観 —

田路 慧

#### はじめに

生・老・病・死は、われわれ人間にとって逃れることのできない限界状況である。現代ほど衣・食・住、医療や保健衛生、栄養などが発達していなかった時代にあつては、生・老・病・死はたいへん厳しく、過酷なものであつたであろう。人々は、病で、災害や飢饉で、争いや戦争で、幼・少・壮・老・男女・貧富の別なく、次々と死んでいき、天寿を全うするものはごく稀であつた。したがって老・病・死は現代よりもいっそう身近かで、生と隣り合わせであり、生はより有り難く愛しく、死は不安や恐怖、汚れや悪として忌み避け逃れたいものであつたに違いない。しかし古の人々は生・老・病・死を自然なものとして受け入れ、それらを直視し、真剣に対峙することによって、自らの運命として引受け、様々の習俗、宗教、文学や芸術、道徳や倫理哲学、そして保健医療や医学、技術や科学、文化、文明を生み育てて発達させてきたのであつた。

ところがわれわれ現代人は自我意識の発達、というよりは肥大化とともに自分の生・老・病・死に対して、もはや自然に対することができなくなつてしまった。今やわれわれは生・老・病・死の現実を自らの力で操作、支配、克服せんと意図し、科学技術なかんづく医学・医療技術・保健衛生・栄養学・体育などの知識技術の発達普及によって、その意図はある程度は実現できつゝあるかのようにさえみられる。

その結果老・病・死の現実には軽視ないし無視され、われわれの意識の外へと押し出され疎遠となり、逆に生は当然視され、眼前の生への執着はいっそう強化増大しているようにさえ思われる。利潤絶対視の高度産業社会においては能率や効率のみを重んずる功利的打算的思考が支配的であり、利潤追求に役立たず非能率的で無用なものに、つまり老病死などに無関心どころか度外視し、病弱者・高齢者・身体障害者などをますます疎外しようとしている。それどころか老病死を、老病死に直面し苦しむ人々をすらすら、利潤追求の手段と

して利用しようとしているとしかみれない現象も起こっている有様である。さらに現代社会においては、生誕も病氣も死もほとんど病院に隔離され、老人もだんだん居場所を狭められ老人病院やホームに押し込められ、また身体障害者たちも施設などに収容隔離されて、われわれの身のまわりから姿を消しつゝあり、巷には少・青・壮・熟年のみが跋扈して生を謳歌している状態となり、われわれは、生存の条件であり、人生の厳然たる事実であるところの老・病・死を忘れ、ますます遠ざかつてしまった。

われわれの人生において老・病・死を意識から遠ざけたり、追い出したりして、生のみ執着し、生のみを謳歌しようとするとき、はたして本当に生は躍動し、充実したものとなるのであろうか。どうもわれわれの眼前の現実はそのようには思われる。生きがいの喪失、人生の目標の亡失、生の空虚感や無意味感、慢性的な欲求不満、心の渇きや空白、あるいは孤独感や寂寥感、不安や焦燥感に悩まされ苦しむ人々が激増しているようであり、いわゆる人間の自己疎外がますます深刻化しているように見える。このことは神経症とか心身症、ストレス病と呼ばれる病気の激増、自殺や精神病、アルコールや薬物中毒などの増大、衝動的虚無的な行動、理由なき殺人や犯罪などの増加蔓延が如実に表しているのではなからうか。人生における老・病・死の度外視ないし疎外は、かえって生の希薄化、無意味化、無価値化をもたらしてきたように思われるのである。

A・デーケン氏も次のように指摘している。

「一見すると、死の抑圧は生の強調を示すかのようであるが、この現象を深く考察して見ると、人間意識の本質的要素である死への意識を抑圧することが、実は生そのものの衰弱や思考の貧困化と表裏一体であることが明らかとなる。人類の精神史を通じて、死の考察は、常に創造的思考のもっとも強力な刺激剤であつた。来たるべき死に思いを馳せる者は、

平凡な日常生活や単なる機能的思考から引き離され、生と死の神秘、人格的な出会いと愛の意義、時間と永遠性といった本質的問題に直面させられ、究極的にはすべての意味への問いを突きつけられる。死の哲学—同時に生の哲学でもある—の再発見は、今日のわれわれに課せられた根本的課題の一つであろう」①

かくて、デーケン氏は「死の哲学」の新たな構築と「死への準備教育」の重要性を強調するのであるが、われわれも強く同意するところである。そこで本論では、われわれ人間に課せられ、負わされている避くべからざる実存的限界状況である「生・老・病・死」の現実を如実に直視観照し、その中で人生いかに生くべきか真摯に考察し、人生の真実を探究した初期仏教思想を中心に「生・老・病・死」の問題に取り組んでいきたいと思う。

## 「 生 」

「比丘たちよ、私はこのうえなく優しく育られ、たいへん恵まれた生活をおくっていた。

邸宅の庭には私のために蓮池が作られ、青蓮や紅蓮や白蓮が美しく咲いていた。部屋には常に栴檀香のかぐわしい香りがたちこめられており、着るものはすべてカーン産の最上の布で作られていた。外に出るときはいつも私のために白い傘蓋が掲げられていた。また私のために三つの宮殿があり、冬には冬の、夏には夏の、雨季には雨季の宮殿で過ごした。雨季の間は女性だけの歌舞をもってかしずかれ、外に出ることはなかった。

比丘たちよ、私はこのような幸せな生活の中で思った。『普通の人たちは自ら老い、病み、死すべき身であり、老い病み死すべきことを超えることを知らないのに、他人が老い、病み、死ぬのを見れば、自分のことは忘れて、厭い、嫌い、忌避しようとする。思えば私もまた、老い、病み、死すべき身であり、老い病み死ぬことを免れることはできない。それなのに、他人が老い、病み衰え、死にゆくを見て、厭い嫌い忌避しようとするのは、私としてふさわしいことではない』と。

比丘たちよ、私がこのように考えたとき、私の青春の高ぶり、健康の自負、生存の驕りはすっかり消滅してしまった」（『中阿含経』 一一七「柔軟経」抄意訳）

これは仏祖釈尊の青春時代の回想であるが、このように釈尊は「生・老・病・死」の問題の解決のために、

出家し、修行し、そして成道して、仏陀、人生の教師、あるいは世尊ないし釈尊と呼ばれ、尊崇され敬愛されるようになったのである。

われわれは一般に「生」すなわち「生まれること」「生きること」を望み喜び、めでたいこととして祝いことほぐ。しかしその実相を観ずれば、われわれは「病・老・死」という逃れることのできない限界状況を背負って生まれ、かつ生きていかなければならないのである。「生」は「病・老・死」という絶対的な自己否定性を包含してのみ生たりうるのである。かかる「生」のもつ本質的な自己矛盾のもたらす不安や苦悩、憂いや悲しみの反省と自覚、その解決、解脱への渴望が、釈尊の出家の動機であったのである。それはまさにわれわれ自身の問題でもあるのである。われわれ人間は、自己が一個の生命体として、今、ここに、生きていることを意識しており、しかも自己の生命が死すべきものであること、今現に刻々と老い死につまあることを、感じ、意識し、自覚することのできる存在である。自己の内なる絶対的否定性を知り自覚できるところに、精神としての人間生命の特質がある、と言うことができよう。この生の内なる絶対的否定性、すなわち無常・無我、無自性・空の実相の自覚こそ、仏教思想の人生観の基底をなし、根幹となるものなのである。かくて「生まれることは苦である」という自覚が、仏教の出発点となる。

「苦聖諦とは何か。生・老・病・死は苦である。怨み憎むものと会うのは苦である。愛するものと別れ離れるも苦である。求めるものを得ざるも苦である。要するに欲望や執着に駆られる心身の有り様は苦である」（『中阿含経』 三一「分別聖諦経」抄意訳）

「生とは何か。それは生けるものが、それぞれの生けるものの部類に、出生し、出現し成就して、色受想行識の五蘊が生起し終って命根を得る、これを生というのである。生苦とは何か。それは生けるものが生まれるとき受ける心身の苦のあまねき感覚のことである」（『 同 』）

仏教では、生の当体である生命は、五蘊和合すなわち色（肉体）受（感覚）想（思考）行（意志）識（意識）の五つの生体の構成要素が生起し結合して「命根（生命力・生命機能）」を得たとき「有情・衆生（生けるもの）」として始まるとみなされている。

また「地・水・火・風・空・識の六界の法が和合するをもってのゆえに母胎より生ず」（『中阿含経』 一三「度経」）とあるように、生命は地・水・火・風・

空・識の六要素の結合したものとも考えられている。要するに生命は五蘊や六界の法が因縁（原因や条件）によって和合したとき「命根」を得、生命体として生起することになるとみなされ、生苦は五蘊和合して命根を得たとき、すなわち託胎結生したとき、現代的に言えば受精卵が子宮に着床し成長をしかけたときに始まるとみなされ、寒熱、飢餓、病気、流産、墮胎、死産など「胎内所受の苦」から、産道を通り外界に生まれ出るときに受ける新生児の苦痛まで考えられている。（『五王経』参照）

生苦の事実は現代の医学においても認められているようである。胎児も脳や神経、感覚器官の形成とともに、母胎が受ける内外のショックやストレスを感受すると思われるし、出生時には強力な圧力を加えられて、否応なく狭い産道を通して外界へ押し出され、初めての強烈な刺激と苦痛を体験することになるわけである。全面的な依存状態にある快適な母胎内から、まったく初めての外界へ押し出されて自立的に生きることを強要される急激な多大の環境の変化は、新生児に強大な刺激と不快と苦痛の感覚をもたらしようである。

「子供が生きている証拠として待ち望まれ祝福される産声は、母親の胎内から外界へ出てきた当惑に対する最初の抗議であるとも受けとれる」のである。（『WHO 世界健康百科 SALUTIS』第六巻参照）

「生まれることによって老死、苦憂悩愁悲など多くの苦の集積があるのである」と仏典に繰り返し述べられているように、われわれが苦しみ悩まねばならないのは、まさにこの世に生まれたことによるのである。われわれはこの世にいのちあるものとして生まれた以上、四苦八苦、内外の二苦、苦苦・壊苦・行苦の三苦など、様々の苦悩を背負って生きていかねばならない。しかも「人のいのちは一呼吸の間あるにすぎない」（『仏説四十二章経』抄意訳）と言われるように、いのちは短くはかなく衰滅を相とし、瞬時に変異していき（無常）実体がなく（無我）、自分の思うようにはならない（苦）ものなのである。

「あるものは母胎の中で滅び、あるものは産婆の家で死んでしまう。またあるものは這いまわっているうちに、あるものたちは駆けまわっているうちに死んでしまう。老いた人々も、若い人々も、その中間の人々も、次々と去っていく。熟した果実が枝から落ちていくように」（『ウダーナヴァルガ』第一章 九〜一〇）

仏教では、生あるものはすべて、それぞれのいのちの営みである「業（行為とその報い）」に従って、欲

界（本能的欲望の世界）・色界（物質の世界）・無色界（精神の世界）の三界、あるいは、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六趣（道）の世界を生死流転輪廻して、無限に苦悩の生を繰り返すと考えられている。

「人は次々と輪廻に陥り、母胎や他の世界に至る。智慧が少なく、おのれしか信じないものは、母胎や他の世界に至る」（『中阿含経』巻三一、一三二「頼陀羅羅經」）

かくて、このように三界六趣の苦界に生まれ、苦しみながら流転輪廻することから、いかにして解脱し彼岸の幸いあふる不死の世界（涅槃）に至るか、が仏教の基本的な課題となるのである。

次に、部派仏教時代の最有力の部派、説一切有部の生の思想を、世親著『阿毘達磨俱舍論』（玄奘訳による国訳）を中心にして観てみよう。

まず、生は「託胎結生の一刹那の五蘊」をもって始まるとされている。母胎内に結実着床し、生命としての力と機能をもったものは「命根」と呼ばれている。この「命根（生命力・機能）」が生根である。命根は前世の業によって生じ、この世に生を受けてから死に至るまでの期間（一期）、有情（生けるもの）の心身を維持するとみなされている。「命根の体は即ち寿にして、よく煖と識とを持す」（『俱舍論』巻五、第一「命根」とあるように、命根は「寿」として自己を体現持続するので両者合わせて「寿命」と呼ばれる。寿命は「煖（体温）」と「識（意識）」を執持し、活動を「用（働き）」とするとされているが、また寿命は煖と識によって一期の間維持されるとも考えられている。寿命の長さは「寿量」と呼ばれ、時代と自然とによって長短の差があるとみなされ、寿量の大小と呼ばれている。寿命ないし命根の顕現と活動が「生」であり、命根が顕現し生を受けることを「結生」または「受生」と言い、胎生のものなら「託生」と呼ばれている。また現在の生を「今生」、過去と未来の生を「他生」と言うのである。

一切の有情の命根が出生する生存形態は「胎生」「卵生」「湿生」「化生」の四種に分類され、またすべての有情は一期の間に「生」「住」「異（変化）」「滅」の四つの相を経るとみなされている。有情が生死輪廻する過程は「生有（生まれる一刹那）」「本有（生まれてから死ぬまで）」「死有（死ぬ一刹那）」「中有（死んでからまた生まれかわるまでの中間）」の四つの状態に分類され「四有」と呼ばれている。さらに「命根は三界の寿なり」と言われるように、寿命は欲・

色・無色の三界において生生活動を行うとみなされている。そして生存を繰り返す輪廻の形態が地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六趣である。「生はこれ一切の苦の安息所なり。苦の良田なるがゆえに生苦と名づく」（『大毘婆沙論』第七八）と述べられているように、この三界六趣の世界に生まれ、流転輪廻することは苦あるのみと考えられているのである。しかも寿命は「刹那滅」、すなわち瞬間的にのみ存在し消滅する、短いかないものであることが強調されている。寿命の尽きるときが「命終」であり、死である。「寿と煖と及び識と、三法の身を捨するとき、所捨の身はあおむきにあるいはうつむきに倒れる。木の思覚なきがごとし」である。

「三世実有法体恒有」の思想を基本におく説一切有部では、「命根」は「実有」であるとみなされ「心不相応行法（心と相応和合しない行蘊）」の一つにあげられている。（しかし経部や大乘仏教ではこの有部の実有説は批判され、命根も仮有にして空なるものとみなされている）。そして命根は有情の業に従って過去・現在・未来の三世にわたり迷苦の三界を輪廻転生すると考えられ、その輪廻の姿が「十二支縁起」の十二の支分をもって解釈説明されている。いわゆる「三世両重の因果」と呼ばれる思想である。

「十二支縁起」とは初期仏教の中心的な思想で「無明・行・識・名色・六処（六入）・触・受・愛・取・有・生・老死」という有情の生存状態を構成する十二の縁（条件）ないし有支（要素）のことである。説一切有部ではこれを有情が三世にわたって生死輪廻する過程におけるそれぞれの分位を示すものとみなし「分位縁起」と呼んでいる。

まず「無明」と「行」は、過去世で煩惱にとらわれ業を作ったときの有情の分位、すなわち心身（五蘊）を指すと考えられ、過去世の二因とされている。「識」はこの過去世の二因によって心識が初めて母胎に託生する刹那の有情の分位であり、「名色」は託生の第二刹那以後、六根がいまだ備わらない有情の分位、「六処」は母胎内で六根を備えた分位、「触」は胎出した後のただ接触感覚だけがある二・三歳までの分位、「受」は感受性の優れている四・五歳より、一四・五歳までの分位とされ、これら識・名色・六処・触・受の各支分は現在世の五果とみなされている。「愛」は愛欲の盛んな一六・七歳以後の分位、「取」は貪著の心の盛んな三〇歳以後の分位、「有」は愛欲や取著によって業を作る分位とされ、これら愛・取・有は現在世の三因とみなされている。「生」は現在世の三因に

よって未来世に生まれる分位、「老死」は生まれてから死にいたるまでの分位とされ、生・老死は未来世の二果とみなされている。

このように、有情の生存形態すなわち生の様相に、過去・現在・未来の三世にわたって二重の因果を立てるので、これら輪廻の相は「三世両重の因果」と呼ばれるのである。有情の「惑（煩惱）」と「業（行為）」が因となり、その果はすなわち「苦」であるから、十二支縁起は「惑・業・苦」の三道におさまリ、この因果の連鎖の中を、有情は果てしなく生死輪廻して苦悩より解放されることはない、とされているのである。

（『俱舍論』第九、船橋・横超・多屋編『仏教学辞典』法蔵館刊参照）

これら有部の生命観は初期仏教の縁起や輪廻の思想をより厳密に分析考察し、理論化していったものと言うことができよう。

「比丘よ、輪廻は無始にして、有情が無明に覆われ、妄執に縛られて、流転し輪廻する始終は知られることはない」（『相応部經典』一五・四「無始相応」一一一）

「これあればかれあり、これ生ずればかれ生ず。これなくばかれなく、これ滅すればかれ滅す」

これは「縁起の法」と呼ばれ『自説経』を初めとして仏典の随所に見られる定型句であり、釈尊の正覚の根本を成す概念である。十二支縁起もこの縁起の法を発展させたものである。ここではこの縁起の法をもって、われわれの生ないし生命のよってきたる因縁を考察してみよう。

今、ここに、存在し生きているわれわれの生命は何を因とし縁として生じたのであろうか。当然ながらわれわれの父母に因って生じたのであり、父母はまたその父母に因って生じたのである。このようにしてわれわれの生命の始原を求めていけば、日本民族の歴史をたどり、人類の生命の始原をさかのぼり、さらには全動物の、全生物の、生命の進化の歴史の起源を求め、ついには地球の、太陽系の、全宇宙の始原にまでたどりついていくことになる。まさにわれわれの生命は無始以来の宇宙の営みの一つの成果として、今、ここに、存在し生きているのである。われわれの生命はただそれだけで孤立し単独に存在しているのではなく、永遠の宇宙の生命の営みの流れの中で、その一つの成果として生かされているのである。

さらに、われわれの生命活動は無数の動物や植物を食べることに縁って、すなわちそれらの無量の生命の死の集積に縁って、また動物や植物の生命活動の利用

に縁って、支えられ維持されることに縁ってのみ可能なのである。消化吸収殺菌などの生命維持の活動も、酵素や白血球など無数の微生物の活動に縁ってなされているのである。衣食住すべて動植物や大地、さらには世界の人々の労働の成果に依存し、精神活動も人類の文化活動の成果に縁って成り立っているのである。われわれ一人ひとりの生命は、大いなる宇宙の全生命活動の成果の一つとして、無量の生命連鎖の中の一つとして生かされ、また死んでいくのである。われわれの生命のみならずすべての生けるものの生命は、『華嚴経』に説かれるごとく、まさに「一即一切、一切即一」の関係にあり、それぞれ絶対的な価値と尊厳を平等に有すると言うことができ、仏教で「四生平等」「一切衆生悉有仏性」「山川草木悉皆成仏」が説かれる所以もここにあるのである。生きとし生けるものすべてが過去世においてはわれわれの縁者親族師友であったとみる仏教の考え方（『相應部經典』『無始相應』参照）もゆえあるものなのである。「阿弥陀仏（はかりしれなく尊い永遠のいのちという仏）」への絶対帰依を説く浄土思想も、このような観点から理解することができるのではなからうか。無量の光りと寿（いのち）という意味をもつ阿弥陀仏はすべての生命を生み育て生かしている、一切のいのちの大元であると解することもできよう。すべて生きとし生けるものは互いに慈しみ助け合い、けっして害したり殺したりしてはならぬ（不殺生）という仏教の根本倫理も、仏教の生命観の当然の帰結なのである。

「すべてのものは暴力に怯え、すべてのものは死を恐れる。自分の身に引き比べて、殺すなかれ、殺さしむるなかれ。

すべてのものは暴力に怯える。すべての生きものにとって生命は愛しい。自分の身に 引き比べて殺してはならぬ、殺さしめてはならぬ」（『法句経』第一二九～一三〇偈）

現代の科学の研究成果によれば、生命現象の基本的な要因は「遺伝子 DNA」であり、生命の体相である物質の究極的な要素は「原子」であるとみなされている。そしてそれらの因ってきたる起源はいまだ不明である。宇宙生成の過程の営みにおいて生じ来たったとみなさざるをえないのである。今ここにあるわれわれの生命はこの観点からみるならば、原子や遺伝子を因ないし縁として発現し、無始以来生々流転して今ここに現に存在しているのである。とすればわれわれの生命は原子ないし遺伝子として、古来より循環しているわけである。われわれはかつて水であり、石や土であ

り、植物であり、様々な動物となって、今ここに人間として存在し、やがてもとの原子に還り物質となり、また植物や動物となり、さらに縁によって人間となって流転輪廻していくのである。仏教の輪廻の考え方はあながち迷信とは言い切れないものをもっていると言うことができよう。

かくてただ一つの小さな生命といえども、全宇宙の営みの一つの頂点として、今、ここに存在せしめられ、生かされ、全宇宙の営みの流れに従って、また宇宙へと還って行くのである。われわれは一つの生命としてすべての生命と同根同胞であり、まさに一切を背負っている、というよりは、一切に生かされている一つの生命なのである。したがって与えられ贈られた生命を、与えられ贈られた期間、全身全霊をもって生きぬき、今ここでの生を全うすることが、われわれに課せられた使命であろう。この自覚が「無常・無我、無自性・空」の真理の体得であり、この真理の自覚にもとずくいのちの営みが「涅槃」と呼ばれるものなのであろう。

## 「病」

「この容色は衰え果て、病の巢であり、もろくも滅びる。腐敗のかたまりで破れてしまう。生命はついには死に帰着する」（『ウダーナヴァルガ』一三四）

「見よ、この粉飾された姿形を、それは傷だらけの身体であって、いろいろなものが集まっただけである。病に悩み、意欲ばかり多くて、堅固でなく安住していない」（『法句経』一四七）

無病息災は古今東西老若男女を問わずわれわれ人間の永遠の願いである。医療の発達した現代においても、不治の病に苦しむ人は無数にあり、病気はまだまだ不安と恐怖の対象であり悩みのもとでもある。医療の未発達であった昔ではいっそう病気は恐怖と絶望であったであろう。実際多くの人々がこの世に生まれるやいなや様々の病によって次々と死んでいったに違いない。病が癒えて長寿を全うした人はきわめて稀であったであろう。古来無病息災が人々の最大の願望とされてきた所以である。仏典にも病に関する記述が随所に見られる。釈尊自身がしばしば病気になる、彼の死の直接の原因も食あたりによる激しい下痢であったと言われている。無病息災への祈願と病気の不安や恐怖の除去さらにはその治療が宗教の最大の起源でありまた目的でもあったと思われる。釈尊は信仰や祈祷による病気の治療や奇跡の示現は迷信として否定し、医師や薬師により、また精神修養、無常・苦・無我の真理の修習



や七覚支の修行あるいは禅定によって、病苦に耐え、治癒を願うことを人々にすすめた、と仏典には述べられている。仏教は宗教というよりもむしろ哲学や倫理学である、と言われる所以である。

「ナクラピター居士は世尊に言った。『大徳よ、私は歳をとり老い衰えてあちこち痛み病気がちです。どうか私を教え導き長夜に安楽を得させて下さい』と。世尊は彼に言われた。『居士よ、汝の身は老い衰え病んでいる。今さら無病は望めまい。このゆえに居士よ、かくのごとく学ぶべし。私は、身は病気になっても、心まで病気にはなるまい、と』」（『相應部經典』 二二—一—「ナクラピター品」抄意訳）

このように釈尊は病身と病心、病身と無病心とを区別し、身体の無常・苦・無我なることを観て、我執我欲を離れ、心は健康に保つことをすすめるのである。また苦痛を受けても、苦痛に縛られ捕われずに感受すること、すなわち苦において解脱することが仏典の随所に説かれている（『相應部經典』 三六—二—一—六「箭」など）が、これと同じく病苦から解脱することによって病苦を克服するのである。われわれは病気になるにそれと捕われ悩み苦しみ、心まで病んでしまい、かえって病気を重くしてしまったり、不幸な事態を引き起こしてしまうことが多い。われわれもたとえ身体は病んでも心までは病まぬように心がけるべきである。また我執我欲我見我慢あるいは貪瞋痴の煩惱に捕われて心の病にかからぬようふだんから修養していく必要がある。

「あるとき老いたる摩訶迦葉が重い病気になり苦しんでいた。そこで世尊は彼を見舞い『迦葉よ、具合はどうかね。私が正しく説いた念・擇法・精進・喜・軽安・定・捨の七覚支を修習せば證知・等覺・涅槃に資す』と説き、慰められた。迦葉は歓喜して七覚支を修習して病より回復した」（『相應部經典』 四六—二—一—四～六「病」抄意訳）

また釈尊は自我の構成要素（五蘊）も六根もすべて無常・苦・無我なることを修習自覚することによって、あるいは禅定によって病苦から解脱し、病気を克服することも説かれている。（『相應部經典』 三五—一—七四～五「病」）

われわれははかなくもろい病むべき存在であることを深く自覚し、日常生活において常に心身の健康に配慮し節制に努め、健康の維持増進に励むことが必要である。しかるに医療技術の発達した現代では、人々はこのことを忘れ、病気になれば病院に行き医者にかか

ればよいと思ひ込み、かりそめの健康を過信して放恣な生活をおくったり、過度の労働や行動を行なっている。そしてついに病気になって初めて、必ずしも医者には全能ではなく医療も未完成であることを知り、愕然としてあわてふためくのである。また逆に医療不信や健康不安に陥り、医者めぐりや薬や健康法あさり、新興宗教にふける人々も多い。仏教で言う「無明」すなわち自分の身体や健康への無知と邪見による醜態である。何よりも自分の心身の実相は無常にして苦・無我なることを正見することが大切である。そして自分の健康は自分で護らねばならないことを自覚し、健康についての正しい知識と考え方を身に付け実践することが望ましい。正しい健康に関する研究と教育の重要な所以である。

しかしどんなに節制し健康維持に努めても無常の身をもつわれわれは病気になるざるをえないことが多い。とくに環境や食品の汚染の深刻な現代においては個人の努力では防ぐことが難しくなっている。そこで病気を予防するとともに、病気に正面から対峙し、病気のもつ積極的な面、人生における意義を考えてみることも必要であろう。われわれは病気になって初めて健康の有り難さを知り、これまでの自分の生活を反省する。病気はまともに自分と対峙し、自分というものを、人生というものをじっくりと直視させ考えさせ、とくに自分が全知全能完全ではなく、愚かではかなくもろい病み老い死すべき、すなわち無常・苦・無我の存在であることを思い知らせ、自覚させてくれる。また病時における不安や苦しみ、孤独や絶望は、人生のもつ様相を教えてくれる。多くの人々の世話や配慮を受けることによって、自分は一人で生きているのではないことを教えられ、他者への目を開かれ、他者の痛みや苦しみや悲しみがわかるようになり、感謝と思いやりの心が芽生えてくる。病気から知り学ぶことは実に多いのである。仏教には「病は善知識（善き友・善い先生）」という考え方があり、また「一病息災」とも言われるように、われわれもいたずらに病気を恐れ逃れようとばかりせず、病気を人生の事実として認め、そこから人生の真実を学ぶ心構えが必要であろう。釈尊は病者の善き友となり、病気を無常無我の人生の真実を直視し発心して仏道に入る契機として導き、多くの人々を救い「大医王」とも呼ばれたのである。また釈尊は病者への配慮や世話や看病は最高の布施、慈悲行としてすすめられている。しかしいづれにしても健康は人生における最大の価値であることにはかわりはない。われわれは与えられたいのちと健康には常に最大の配慮

をなすべきであろう。

「健康は最高の利得であり、満足は最上の宝であり、信頼は最高の知己であり、涅槃は最上の楽しみである」  
 (『法句経』 二〇四)

## 「老」

不老長生はわれわれの根源的な願望である。そのため古来たいへんな努力がなされてきた。現代では一昔前には考えられなかったほど元気な老人たちが街を闊歩している。しかし一方では新たに様々の高齢者問題が生起して深刻な様相を呈してきている。どんなに医療が発達しても、どんなに節制自重しても、老いることをわれわれは免れることはできない。仏教では老いは死とともに、われわれが避け逃れることのできない限界状況として「老死」と一つにまとめ、この世の一切の苦憂悩愁悲の総称として用いられている。仏典にも老いを悲嘆する言葉がいたるところに見られる。

「牛飼いが棒をもって牛どもを牧場に駆り立てるように、老いと死とは生きとし生けるものの寿命を駆り立てる」(『法句経』 一三五)

「汝、卑しき老いよ！いまましい奴だな。おまえは人を醜くするのだ。麗しい姿も老いによって粉碎されてしまう」(『同』 二九)

「わざわざなるかな哀れなる老いよ！ものを醜くする老いよ！しばし麗しき姿も老いのために破らる。たとい百歳まで生きるとも、ついには死を免れず。老いはどんなに小さなものも見逃さずすべてを破る」(『相应部经典』 四八-四-五「老品」)

しかしわれわれはふだん自分が老い死すべき存在であることを忘れていて、先述の釈尊の出家の動機を述べた引用でもみたように、われわれは自分の老いることを棚に上げて、他者の老いさらばえていくのを見て、忌み嫌い目をそむけ、軽蔑したり邪魔物扱いしたりする。人は老いても自分は別で、自分はいつまでも若いと思いついでいるのである。

老いぼれと面罵せし彼をわれ愛す

『若き特権』もたちまち過ぎむ 筏井 嘉一  
 われわれは自己が老いるべき、いな刻々と老いつまある存在であることを直視し自覚して、そのことに対応しながら生活することが必要である。意識内で老いを度外視し否定して生きることは、意識と現実との乖離を生み、その矛盾が様々の問題や病気や障害を引き起こすのである。老人性痴呆も老いの認知の失敗が原因の一つに挙げられている。われわれは潔く老いを認め引受け、早くから高齢期の問題に取り組み、対策を

立てておかねばならない。また個人だけでなく社会全体の問題として、人々と共に手を携えて取り組むことが望ましいであろう。現代のような超高齢化社会にあっては、その解決は個人の限界を越えていると言うことができよう。高齢化社会の問題は、やがて老いるべき若者たち自身が真剣に取り組むべき問題でもあるのである。

ただ高齢であるというだけで敬愛され尊重される時代はもはや終わったと言えよう。もともと年齢そのものには価値はなく、年齢にふさわしい知恵と人徳があって初めて人々に尊重されるのである。ただ高齢であることのみを誇り人々に尊重を要求することは、老人の高慢と甘えであり醜いものである。またいつまでも元氣だからと現役でねばることは、若い人々の道をふさぎ、組織や社会の活力を奪い衰退させてしまう。老害などと言われ、世の人々に嫌われるものである。高齢者には高齢者にふさわしい立場と言動があるはずであり、その立場をわきまえて行動するよう心がける必要があろう。身の程を知るといことは高齢期になるほど必要なのではなからうか。

「頭髪が白くなったからといって『長老』なのではない。ただ歳をとっただけならば、『空しく老いぼれた人』と呼ばれる。誠あり、徳あり、慈しみがあって、傷つけず、慎み深く、自ら心を整え心の汚れを除き、気をつけている人こそ、『長老』と呼ばれるにふさわしい」(『法句経』 二六〇～一)

「学ばざる者の老いるは、牛の老いるがごとし。肉は増せども智慧は増さず」(『法句経』 一五一)  
 われわれ人間は肉体的生命・社会的生命・精神的生命の三つの生命をもち生きることができる。肉体的に衰え、社会の第一線から退いた高齢期こそ、精神的生命を充実発展させるときではなからうか。古代インドでは人生を児童期・学生期・家長期・森棲期・遊行期に分け、五〇歳ぐらいになると引退し、出家して森に入り、修行に励み、修行が成就したと思うと、街を巡り道を説き人々を教化して一生を終ったと言われていた。われわれも時間的にゆとりのできる高齢期こそ学習や修業に励み、自己研鑽を怠らず精神的生命の充実に努め、文化の創造に貢献したいものである。また高齢になると社会から疎遠になりがちであるが、運良く長寿になることができたことを喜び感謝して、今度は自分や会社や家族のためだけでなく、社会のため、人類のため、来たるべき子孫のために、活動して何かを残して死にたいものである。幸い高齢期はなにものにも捕われることなく、だれにも遠慮することなく自己

を主張し活動することができる。自由と民主主義、平和や核、環境破壊など現代は取り組むべき重要な問題が山積している。高齢期こそ、ニイチェの言う「遠人愛」や、親鸞の説く「すえとおりたる慈悲」を実践すべきときであろう。

若年者が激減しつつある現在、彼等に多くを期待することはできないであろう。これからは高齢者同志が助け合わなければならない。高齢者こそボランティア活動に積極的に取り組むべきである。そしてそのことが自分自身の生きがいとなり、孤立を防ぎ、心身の健康の維持や痴呆の予防にもなるのである。自分の中に閉じこもり子供や人を当てにばかりして、愚痴と泣き言と不平不満や人の悪口ばかり言いながら、空しく死を待つようなことだけはしたくないものである。まさに高齢期こそ菩薩道、すなわち布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六波羅蜜を実践すべきときではなからうか。

## 「 死 」

死はすべての生きとし生けるものの避くべからざる運命である。しかもわれわれ人間はそのことを意識することができる。自我意識をもつものにとって自分自身のみならずすべてを無に帰す死は苦痛であり恐怖であり、不安であり絶望であり、思うも不快な忌み避くべきことである。仏典には死の現実を直視し、悲嘆する言葉が多い。

『私は若い』と書いていても、死すべきものなる人間は、だれが自分のいのちを当てにすることができようか？若い人々も死んでいくのだ。男も女も、次から次へと……」（『ウダーナヴァルガ』 一一八）

「いくら財産を蓄えても、最後は尽きて無くなってしまふ。高い地位や身分も、終には落ちてしまふ。結びついたものはやがて離れてしまふ。生命は結局は死に至る」（『ウダーナヴァルガ』 一一二二）

「子供や財産のことに気を奪われて心が執着している人を、死は捕らえさらっていく。一眠っている村を大洪水が押し流すように」（『法句経』 二八八）

「死刑囚が一步一步と歩いて行って、刑場に赴くように、人のいのちも赴く」（『ウダーナヴァルガ』 一一一四）

「それゆえに、人々よ、常に禪定を楽しみ、心を安定統一して、努め励み、生と老との究極を見極め、悪魔とその軍勢に打ち勝って、生死の彼岸に達

するものとなれ」（『ウダーナヴァルガ』 一一四二）

われもまたやがてゆく身と知りぬれど

今日明日とはおもはざりけり 古歌  
今まではひとのことかと思ひしに

おれの番とはこいつたまらん 太田蜀山人  
われわれはふだん自分が死すべき存在であることを忘れ、あるいは無視して、さらには意図的に度外視して過ごしている。しかしそのことはかえって生の現実を希薄化し、空虚なものにしてしまうことはすでに述べたとおりである。死の現実を直視し自分が死すべき存在であることを自覚して生きることが、われわれの生そのものを意義ある充実したものにするのである。死の自覚は我見我執我欲我慢の自我の傲慢を打ち破り、死すべき共通の運命と悲しみを背負うものとして、他の生きとし生けるものへと目を開かせ、共感と連帯の慈悲の心を芽生えさせるのである。

『われらはここにおいては死すべきものである』と覚悟をしよう。この理を他の人々は知らない。しかしこの理を知る人々があれば、争いは静まる」（『法句経』 六）

「この身は泡沫のごとくであると知り、陽炎のようにはかないものであると悟ったならば、悪魔の花の矢を断ち切って、死王に見られないところ（彼岸）に達するであろう」（『法句経』 四六）

「努め励むは不死の境地、怠りなまけるは死の境地、努め励む人々は死なず、怠りなまける人々は死せるがごとし。このことをはっきりと知って、よく努め励む人々は、努め励むことを喜び、聖者たちの境地を楽しむ」（『法句経』 二一～二）

「真理が正しく説かれたときに、真理に従う人々は、渡り難い死の領域を超えて、彼岸（不死）に至るであろう」（『法句経』 八六）

「人はただ生きるのではなくて、善く生きることが大切だ」（『クリトン』）とソクラテスは言ったが、高齢期においてはとくに、ただ馬齢を重ねるのではなく、善く生きるよう心がけることが大切であろう。死を目前にしての一日は宝玉よりも貴重である。

「不死の境地を見ないで百年生きるよりも、不死の境地を見て一日生きるほうが優れている。最高の真理を見ないで百年生きるよりも、最高の真理を見て一日生きるほうが優れている」（『法句経』 一一四～五）

死の不安と恐怖を克服するものは、なによりも真理と、真理への希求とその体得実践、すなわち仏道を歩



むことなのである。真理の体得実践は、われわれをして生老病死を超越させて生死の彼岸に導き、不死の境地（涅槃・法悦）をもたらし、死の不安と恐怖を解脱克服せしめるのである。われわれが正しい目的に向かって無心に専念努力しているときには、死のことは念頭になくなるものである。

われわれは死に対してもっと主体的に対峙すべきであろう。死を単に喪失や別れとして受けとめるだけでなく、新たな出発、旅立ち、門出として、積極的に取り組み十分な準備と心構えをしておくことが望ましいのではなからうか。自分の老死は自分の人生の総決算であり完成であり、最後の花道であると覚悟して、日頃から意識的に計画準備して創造的に取り組む必要がある。生まれることは自分の意思では如何とも難しいが、生き・病み・老い・死ぬことに関しては、ある程度は自分の意志で設計実現創造できると言えよう。とすればせめて生き方・病み方・老い方・死に方ぐらいはふだんから考えておくべきであろう。祖父祖母あるいは父母の生きざま・病みざま・老いざま・死にざまはなによりも子や孫への「死の教育」なканずく「人生の教育」となるであろう。自分の人生の舞台の最後の花道をどう演出しどう飾るかは、人生の最大にして最高の課題ではなからうか。生かされている間は精一杯生き、死ぬときは人間らしく、感謝して死にたいものである。

涙までは 海女も襲きる 時雨かな  
瓢 水

## おわりに

「人間の生を受けることは難しい。死すべき人々に寿命があることも難しい。正しい教えを聞くことも難しい。諸仏の出現したまうことも有り難し」（『法句経』 一八二）

「この世は心によりて動かされ。心によりて悩まされる。ただ心なる一つのものありて、すべてのものを隷属せしむるなり」（『相应部经典』 一六二「心」）

心こそ 心まよわず心なれ  
心に心 心ゆるすな 沢 庵  
われわれは人間に生まれ、生きていることをあたりまえと思っているが、輪廻転生の観点から見れば、こうして人間に生まれ、生きておれるということ是不思議な有り難いことである。「生」の節で見たとおり、われわれのいのちは与えられ、贈られたものであり、われわれは生きているのではなくて、生かされている

のである。しかも運良く長寿を得たとしても、それまでに無数の人々、生けるものどもが、私に代わって死んでいっているのである。多くの生けるものどもの死の集積の上に、今、ここに、私は生かされているのである。われわれは先ず第一に、この生かされて生きているという真実を直視自覚すべきであろう。この自覚が人生の意義と価値、目的ないし使命をわれわれに教えてくれるのである。この与えられ贈られたいのちをできるかぎり善く生きぬくことが、また多くのいのちを生かすこととなるのである。そしてこの自覚が生・老・病・死の四苦の解脱と涅槃に資するのである。自分の人生は自分の心のもち方如何にかかっているのである。

「イカサレテイル ヨロコビ イカサレテイル  
ヨロコビ イマココニイカサレテイル ヨロコビ  
ナニモノニモサエギラレズ ジダイヲモコエテ イ  
マココニイカサレテイル ヨロコビ コノヨロコビ  
ニマサルヨロコビハナイ」

竹部勝之進『詩集はだか』

幼児期に両手両足を失い、幾多の艱難辛苦をへて生きぬき、世の人々の光となって、七二歳の天寿を全うした、中村久子さんは次のように詠んでいる。彼女を支え導いたのは言うまでもなく仏教である。

業報とおもひつくらきわがむねを  
いだきてなきぬ夜半のしじまに  
手はなくも足はなくともみ仏の  
そでにくるまる身は安きかな  
手足なき身にしあれども生かさる  
いまのいのちはたふとかりけり  
生かさるるよろこびにはふ春の梅

中村久子『こころの手足』

善き師、善き友、善き交遊をもつことも、人生を有意義に生きる秘訣である。

「阿難よ、人々は私を善き友とすることによって、病み、老い、死なねばならぬ身にして、病、老、死より解脱しうるのである。阿難よ、このことによっても、善き友情、善き仲間、善き交遊をもつということは、この聖なる道のすべてであるということがわかるではないか」（『相应部经典』 四五—二「半」）

高齢期の最大の不幸は「孤独」である。われわれは若いときから心を開き徳を積み友情を育み、善き師、善き友をもつよう心がけるべきである。親しい友の理解と励ましほど、困ったときに有り難いものはない。仏道はまた善き友情の道なのである。

成人病や痴呆や寝たきりなど高齢期の問題は老化がすみみ心身とくに意欲が衰退してから取り組んでも手遅れである。われわれ生けるものは老い・病み・死すべきはかなくもろい存在であること、人生は二度とないこと、常に健康に留意して、与えられ生かされているいのちを大切に価値あるものとするように生きなければならぬことを、幼児期から繰り返し教え自覚さ

せていくことが望ましいであろう。現代社会において、今なによりも緊急の課題は、生・老・病・死に関する研究と教育と学習ではなかろうか。

註① A・デーケン著『死を教える』（メヂカルフレンド社刊） 一〇～一頁

参 考 文 献

高楠順次郎監修『南伝大蔵経』 全六五巻七〇冊	大蔵出版株式会社
国民文庫刊行会編集『国訳大蔵経』 全二〇巻	第一書房
世親著玄奘訳『阿毘達磨俱舍論』（国訳）	上記第一巻所収
国訳一切経刊行会編『国訳一切経』印度撰述部 全一五五巻	大東出版
増谷文雄編『阿含経典』 全四巻	筑摩書房
梶山・桜部・早島・藤田編『原始仏典』 全一〇巻	講談社
中村 元訳『ブッダの真理のことば・感興のことば』	岩波書店
（本論の『法句経』及び『ウダーナヴァルガ』の現代語訳は本書の訳語によるところが多い。記して謝意を表したい。）	
A・デーケン編『死への準備教育』 全三巻	メヂカルフレンド社
樋口・平山編『生と死の教育』	創元社
中村久子著『こころの手足』	春秋社

平成元年 1月17日受付  
平成 2年 1月18日受理